

〈書評〉

Thermochemistry and Its Application to Chemical and Biochemical Systems. ed by Manuel A. V. Ribeiro da Silva, D. Reidel Publishing, Dordrecht (1984). 845頁 約3.1万円

1982年7月5-15日にポルトガル北部の大西洋に面した保養地 Viana do Castelo で開催されたNATO主催の夏の学校, NATO Advanced Study Institute on "Thermochemistry Today and Its Role in the Immediate Future"の講義内容を収録したもの。内容を分類すると、装置・方法論(滴定, ミクロ, DSC, 大量試料燃焼熱, 伝導熱量計出力のデコンボリューション) 6件(5人), 蒸気圧 5件(5人), 錯体 5件(5人), 有機金属 3件(2人), 溶液 3件(2人), 生化 6件(4人), 気体イオン・ラジカル 3件(2人), 低温熱容量 5件(2人), 速度論 1件(1人), 分子内部回転 1件(1人), 熱力学データの批判的算定 1件(1人), 近未来予測 1件(1人)となり(カッコ内は講師数で, 連名の場合も1人として扱う), 合計40件, 31人で, 上記日程からして, 毎日5件程度づつ講義が行われたのであろう。参加者総数が51名だから, 学校というより勉強会の趣きがあったに違いない。編者(同時に夏の学校の組織委員長)は, 溶液反応カロリメトリーをR. Irving教授(英国サリー大学)の下

で修め, 現在, アセチルアセトン錯体の熱化学を研究するポルトガルのオポルト大学の少壮教授である。講師の顔ぶれは, アメリカからの数人をふくめ, 西欧のめばしい研究者のかかなりの部分が一堂に会した感がある。

単純計算で, 1件当たり21頁の紙数があり, 各テーマ毎に, 歴史的背景, 現状, そして最先端の知見が, 講義として当然含まれるべき基本的説明と共に展開されており, 中身は濃い。実験熱化学の伝統的分野と新興分野の両方についてのまとまった講義として読むことができ, 直接に関心のある分野だけでなく, 関連分野について新しい知識を得るのに, 格好の書籍と云えるだろう。お勧めしたい本である。

研究者なら誰でも気になる近未来予測 (Prof. H. Skinner, Univ. of Manchesterによる)の内容を簡単に紹介する。減少傾向(燃焼, 低温熱容量カロリメトリー), 現状維持(生化学, 有機金属), 重点の移動(データ集作成→オンライン化, 二成分系→多成分系), 成長傾向(高圧源質量分析, イオンサイクロトロン共鳴等, ミクロカロリメトリー), 地平線上(光化学, 電気化学, 界面, 熱化学的速度論, 高圧)。個々の項目については様々の意見が出る所であろう。 (阪大理・崎山 稔)

『熱測定』編集委員会

(委員長) 崎山 稔

(編集委員) 稲場秀明, 児玉美智子, 高木定夫, 高橋克忠, 十時 稔, 村上幸夫

(地域編集委員)

板垣乙未生, 小沢丈夫, 草野一仁, 斎藤安俊, 丸田道男, 横川敏雄

熱測定 Vol. 11, No. 4, 1984 昭和59年10月5日印刷
昭和52年5月27日 第4種 昭和59年10月10日発行
郵便物(学術刊行物)認可

編集兼 日本熱測定学会 松本直史
発行人

〒113 東京都文京区湯島1-5-31 第一金森ビル内
電話 03-815-3988 振替 東京9-110303